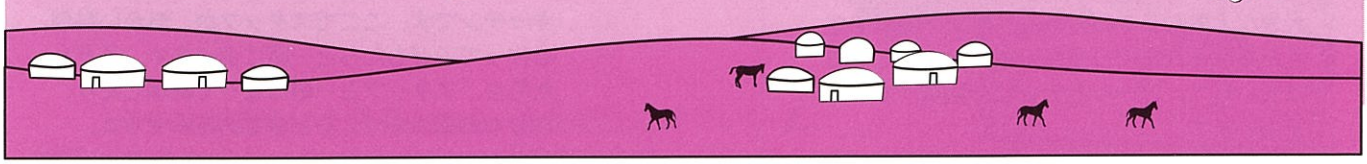
NPO法人子どもセンター「パオ」ニュースレター　発行:子どもセンター「パオ」事務局　発行日: 2009年1月1日

NPO法人 子どもセンター パオ

NewsLetter

vol.9

シェルター「丘のいえ」だより⑥ ●
シェルター「丘のいえ」から ●
パオな人インタビュー:矢野きよ実さん ●



パオの現(いま)在

シェルター「丘のいえ」だより⑥

「私って運がいい」

ある晴れた日、私は、丘のいえから次のステップへと巣立って行く彼女を助手席に乗せ、彼女が自立を目指す拠点となる場所に自動車を走らせていました。道中、過去につらい環境にあったことから、パオと出会った頃のことや、これからの生活のことを期待一杯にとりとめもなく話をしていた彼女は、ふと「私って運がいいと思う。」と言いました。私は、その言葉を聞いて、少しうれしくなりました。

数週間前、つらい環境から逃れてパオに来た時には、不安そうにしくしくと泣いていました。行き場がなくようやくつながったパオですが、パオのことを彼女は何も知りませんでした。しばらくここで寝泊まりできると言われても、不安なのは当然だと思います。初めてパートナー弁護士の役割を担当することになった私は、彼女の不安を一挙に取り除く魔法があるわけでもなく、初対面日はひたすら「大丈夫だよ」オーラを送りつつ、できるだけ穏やかに、かつ明るく、彼女を丘のいえまで送り届けました。あのときの彼女は、きっと一瞬先も予測がつかず、ただわらをもつかむ思いであったことでしょう。

その彼女が、丘のいえで時間を過ごした後、「私って運がいい」と言うのです。パオとの出会い、スタッフに支えられた丘のいえでの生活を、彼女なりにプラスに受け止めてくれていたことが伝わってきました。

パオで子どもたちを支援しようとする仲間たちは、子どもたちが少しでも傷ついた心と体を休めることができるようにと思いながら、各自の役割を担っています。でも、大人がそうおもんぱかって「支援」を提供するからと言って、子どもが必ず休息できるわけではありません。彼女もそうでした。

丘のいえでは、生活支援員が食事やその他身の回りの世話をしてくれ、子どもがゆっくりと羽を休める場所と時間ができるよう配慮してくれます。寝ていても、テレビを見ていても、本を読んでいても、「いつまで○○しているの！」と怒ってくる大人はいません。ところが、彼女は、「何もしないでいる自分」にすぐに苛立ってきました。強い不安を訴える彼女のもとへ行って彼女の不安に耳を傾けながら、彼女が今まで、常に大人の都合で「大人の役に立つ」ことを求められ、そうでなければ非難されるという生活を送ってきたのだなと感じました。丘のいえでの自分が、彼女の目には「役に立ってない自分」「他人に世話されている自分」として否定的に映っているようでした。彼女自身が「大人の都合」の眼を取り込んでいました。彼女もまた、心が疲れ果てていても休むことに罪悪感を持たされて追い詰められていく子どもたちの一人であることを感じました。

心身共に疲れているのに「ちゃんとしなきゃ」と焦る彼女に、「休んでいいんだよ」とメッセージを送り続けてくれる丘のいえのスタッフの暖かな雰囲気が、彼女の中に確実に届いているのだと思います。何たって「私って運がいい！」ですもの。

（子どもセンター「パオ」パートナー弁護士T）